中国貨幣の歴史

11 「五銖」銭の鋳造量不足と悪銭化、現物貨幣化の進行－後漢時代の貨幣－

「五銖」銭

剪輪銭（せんりん）　　綖環銭（えんかん）

1枚の「五銖」銭を打ち抜いたもので、内側の剪輪銭はそのまま使用されたが、外側の綖環銭は鋳銭の原料として鋳潰された。

四出文銭（ししゅつもんせん）（裏）　　薫卓小銭（とうたくしょうせん）

「五銖」銭の背面に四本の線が出ていることから四出文銭と呼ばれた。また薫卓小銭は小さく、粗雑な造りの鋳型で作られたため外周や孔の形も不明瞭となっている。

後漢王朝を樹立した光武帝時代に「五銖」銭が復活するが、銭貨の鋳造量不足や流通の地域的、階層的な偏りから、王朝中後期にかけて剪輪銭などにみられる悪銭化とともに、布帛などの現物貨幣化が、進行した。

（写真は全て実物×100%）

王莽の「新」王朝（紀元後8～23年）は、貨幣改革をはじめとする経済改革の失敗と、赤眉の乱などの内乱のなかで崩壊した。「新」王朝を崩壊に導き、混乱を収拾したのが漢王朝の流れをくむ劉秀（光武帝）で、25（建武元）年、諸将に推されて皇帝に即位し、洛陽に都をおいて漢を復興し、ここに後漢王朝を樹立した。

後漢王朝の樹立当初は、まだ、西方の河西地域（現在の甘粛省）に隗囂、蜀（現在の四川省）に公孫述という豪族が自立しているという政治的・軍事的状況から、財政基盤の確立などの施策はもとより、新たな銭貨の鋳造にも着手することはできなかった。

王莽時代前後の貨幣流通をみると、前漢後期以降の原料銅の生産低下を背景とする銭貨不足の深刻化と、相次ぐ貨幣改革の失敗や戦乱による混乱のなかで、布帛（絹布・麻布）・穀物など現物貨幣の役割が増していった。河西地域で出土した当時の木簡により、銭のみによる価格表示にかわり、銭と穀物による二元的な価格表示・取引が行われていたことが確認されている。他方、戦乱の影響がなく鉄生産が盛んであった公孫述の蜀では、後漢初期の時点で鉄製の「貨泉」（「新」末期に「五銖」銭と同重量で作られた銭貨）が鋳造されていたほか、河西地域でも銭貨が鋳造され、地域により独自の貨幣を流通させていた。

光武帝は、隗囂、公孫述などを平定し37（建武13）年に中国全体を統一し、ようやく政治的安定を確保する。田租などの土地関係税や算賦などの人頭税を確保し後漢財政の基礎を固めるため、39（建武15）年から土地測量や人口調査を強力に推進した。翌40（建武16）年には、前漢以来の伝統である「五銖」銭の復活に踏み切った。この時期には、前漢・王莽時代の首都長安付近に集中していた鋳銭機関が戦乱により壊滅的な状況にあったが、「五銖」銭の鋳造は、蜀の例のように地方（郡国）に蓄積されていた鋳銭技術を活用し、王莽時代の銭貨を改鋳することで進められた。「五銖」銭の復活当初は、大量に改鋳が行われ「五銖」銭への転換が急速に進み、布帛で代納されていた税の徴収が銭納に復するなどの動きもみられた。しかし、原料銅産出の不足から「五銖」銭の大量鋳造は長く続かず、総体としての銭貨供給量は前漢時代に比べ格段に少なかったため、銭貨不足は解消せず、布帛などの現物貨幣が併用された貨幣流通状況を変えるには至らなかった。

三代章帝時代（75～88年）に、一時的に銭貨流通が停止された。当時、銭貨流通は税の銭納などで洛陽に集中し、その保有も政府や富裕層に偏り、また、現物貨幣化していた穀物の価格が相次ぐ旱害などにより高騰していた。銭貨の流通停止は、そうしたなかで政府保有の銭貨価値の維持を図ったものと考えられている。一方、民間レベルでは、貨幣量の不足に対し、銭の中央を打ち抜いた縁環銭、剪輪銭など悪銭化が進行した。

四代和帝時代（88～105年）以降、自然災害の頻発やチベット系民族「羌族」の反乱などを背景に、後漢王朝の権威は徐々に衰えていき、黄巾の乱（184年）をきっかけとして崩壊する。後漢の末期、「四出文銭」と呼ばれる「五銖」銭が鋳造されたが専ら皇帝の蓄銭目的に使用され、また、剪輪銭を摸して鋳造された「薫卓小銭」はかろうじて銭の形をとどめた悪銭で、これらは後漢末期の銭貨流通の混迷を物語るものといえる。

［山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館］

【参考文献】

佐原康夫、「漢代の貨幣経済と社会」、『漢代都市機構の研究』、汲古書院、2002年
山田勝芳、『貨幣の中国古代史』、朝日新聞社、2000年
山岡直人、「中国貨幣の歴史10 新・王莽の貨幣改革－前漢後期～新・王莽時代の貨幣－」、『金融研究』第24巻第2号、2005年